

福井県無形民俗文化財

雲濱獅子

小浜市一番町 雲濱獅子保存会





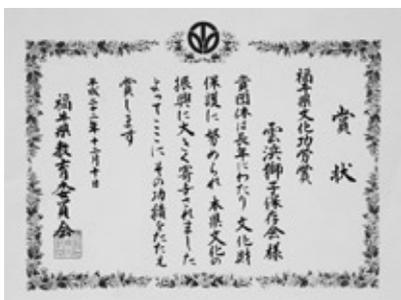
天皇、皇后両陛下天覧の榮譽をたたえる賞状



伊勢神宮奉納感謝状



文部大臣表彰



福井県文化功労賞



小浜城址をバックに舞う

目次

発刊のことば	1
区長祝辞	2
雲浜獅子の由来	4
演技と内容	15
後継者育成	22
歴史こぼれ話	24
川越ささら獅子舞との友好関係	26
雲浜獅子のルーツは今日の川越「石原のささら獅子舞」なのか	29
むすび	33
附 現在までの主な上演	36

発刊のことば

雲浜獅子保存会会長 小川和彦

酒井忠勝公が寛永十一年（一六三四）若狭の國小浜藩主に国替えにより武州川越から伝えられた獅子舞は、約三百年以上、先輩各位が築きあげ残してくださいました。歴史と伝統に育まれてきたものです。

保存会員をはじめ、一番町区民の皆様方のふるさとの遺産として、世代をつなぐ絆といえるでしょう。

当保存会は、県指定無形文化財の名に恥じることのないように、その技の伝承と研鑽に努めてまいりました。また後継者を育成していくことで、その誇りと栄光を後世までこの雲浜獅子を末永く継承していくことが我々の責務であると考えております。

保存会に対しまして、皆様方のあたたかいご支援、ご協力を賜わっておりますことに心より厚くお礼申し上げます。発刊のことばとさせていただきます。

平成二十三年九月吉日

祝辞

平成二十三年度一番町区長 平田正良

この度の雲浜獅子冊子発刊にあたりまして心からお祝い申しあげます。私のご縁を頂き、この伝統芸能に繋がりました以来、約三十数年の年月がたちました。振り返りますといろいろの思いが交錯いたします。今になって感じられるこの獅子舞の魅力について私なりに述べさせていただきます。

いろんな時代があつて、いろんな人の生き方があつて、又人それぞれの考え方があつて、それら諸々止まらない流れの中に翻弄されつつも、しかし伝えつづけられた伝統芸能があります。先輩諸氏の絶え間ないご尽力により昭和三十二年三月十一日に雲浜獅子として福井県の無形民俗文化財に指定されました。今日、藩祖酒井忠勝公が武州川越の地より伝えしときから約三百八十年の年月が経過しようとしています。

さて、この雲浜獅子の魅力は、その舞の中に異性への情愛の衝動が込められているところです。その為に、むきだしの、ほとぼしりを感じさせるような争いの、激しい動きのある舞となっています。

この獅子舞の由来の地とされる関東東北地方は、遠く遡れば、その昔武家の政権を生んだ地でございます。都から遠く離れた当時の武家は「野にしても、けっして粗にあらず」といしましめ、かえって脆弱な都の公家文化を嫌っていました。この獅子舞いは、質実剛健を尊んだ坂東武者の心意気を感じるかのようです。「武骨の中にも優雅な舞」と表現されるところです。舞の中に仕組まれた物語は、やがて争いを終わらせて、慈しむ和解の宴へと導かれていきます。花も嵐もある人間模様が織り込まれているのです。

つわものどもが、歴史を駆け巡ってきたかのように感じられるこの獅子舞の魅力について、湧きあがるままに、感じるままの思いを交えまして書いてみました。共感を頂けますと嬉しくおもいながら、長い年月を経て伝え続けられてきたこの伝統芸能が、いつまでも失われる事の無いよう伝承される事を願いつつ、ご挨拶の言葉とさせていただきます。

雲浜獅子の由来

江戸時代

雲浜獅子は、埼玉県川越市石原町にある観音寺に奉納されていた「ささら獅子」を、寛永十一年（一六三四）に酒井讃岐守忠勝公が、若狭小浜に国替えの際、連れて来た事に始まります。

川越のささら獅子の由来について、昭和五十七年、元ささら獅子保存会長の三澤政太郎氏発行の「川越の籠獅子舞」にこう記されています。

「川越市石原町高沢山妙智院観音寺は、比叡山の末寺で弘法大師の草創にかかるもので慈覚大師の再興の所で、しかも御水尾天皇の勅願所でもある。本尊は大悲観世音菩薩です。

石原のささら獅子舞は、慶長十二年三月（一六〇七）、観音寺で普門品の經旨に則り、悪魔を降伏し、災難を消除して国利民福を祈り平和を謳歌せしめようとする趣旨に基づいて、観音祭にささら獅子舞が演じられたのが始まりとされています。」



川越ささら獅子舞

酒井讃岐守忠勝公が武州川越から若狭小浜に国替えの際、なぜこの獅子舞を連れてきたのかについて、昭和三十五年雲浜獅子保存会が発行した「川越髹獅子舞由来記」の中に次のように記されています。

「抑々酒井公は代々観音に信仰が深かったのであるがわけても忠勝公が斯く獅子舞を賛美賞愛されたのは一つには忠勝公の代となって最初の年即ち寛永四年三月（一六二七）例祭のみぎり城内において演舞せる折柄はからずも幕府の上使に接し十万石加増の恩命を蒙ったという因縁からである。

この光栄に浴してから以来忠勝公の観音に対する信仰、獅子舞に対する賛美は益々深くなった。そして国替の時には獅子のみならず演技に熟達せる者数名を引き連れて之を関東組と称して扶持米を給した。

尚又臣下に命じて技を練らしめ観音寺の祭の日を同じうして祭礼を行い武州在城当時をしのばれた。

その当日又もや加禄の吉報に接し、かつ大老の重職に任ぜられたので信仰心は更に深くなったという。」

実際、酒井忠勝公が十万石に加増されたのは、寛永九年（一六三二）であり、大老に就任したのは寛永十五年（一六三八）の事です。

若狭の獅子の様子を記した文献は、あまり見当たらないが、江戸時代の末のころに「諸国風俗問状」と題する木版印刷の質問書を配布して、国内各地からその地方の答書を求めた調査事業が行われました。文化十二、三年西暦一八〇〇年のころである。「若狭国小浜領答書」の中に広峰神社の祭礼、祇園祭の様子が記されていて、その中に現在の獅子舞の様子がしるされています。獅子の一行を関東組という、と記されています。また嘉永四年（一八五一）に小浜藩士田中岩五郎貞正が川越にある先祖の墓参りをした時の記録の中にも石原町の獅子舞に関する記事があったのを、元小浜藩右筆の山田吉令が明治十七年（一八八四）に書き写した書状に、若州の獅子と呼ばれていたように記録されています。江戸時代、川越より伝えられた獅子は、城中の祝い事と、藩主の住む産土神の祭礼であった広峰神社祇園会のみ、出演を許されました。

明治時代

明治になり、廃藩とともに「関東組」の人も分散されたため、獅子も中断されました。

明治六年旧六月七日（一八七三）、広峰神社祇園会に旧雲浜村有志の者が申し合わせて、残られた関東組の人の指導を受け、道具などを借り受け奉納しました。



明治40年5月、小浜神社例祭に奉納すべく一番町通りに行列を整えた雲浜獅子



平成22年に発見された迎恩社の写真で獅子の最古の写真である(明治25年9月26日撮影)

しかし明治八年(一八七五)に、旧城郭に藩祖を祀る小浜神社が創建され、獅子の由来からみて縁故が深いとして広峰神社への奉納を取止め、旧関東組の人が持っていた道具を譲り受け、衣裳を新調し小浜神社に奉納するようになりました。

獅子保存会的な有志の団体は、「迎恩社」と名乗り旧雲浜村青壮年有志が小浜神社に奉納を続けました。

明治二十四年(一八九一)になると、玉前区は小浜八幡神社例大祭「放生祭」に獅子を出演させるため獅子頭を新調しました。

玉前区は、明治七年(一八七四)の区割改正により瀬木町七十戸、新町二十八戸、塩浜小路のうち三戸を合わせてできた区です。

瀬木町は、江戸時代の祇園祭礼には山車「大黒山」を出していました。

明治四十年四月(一九〇七)に、一番町青壮年有志の方が獅子頭を新調し、町内に整列した写真と酒井家別邸で撮影された写真は、迎恩社の写真が発見されるまでは獅子の最古の写真でした。

平成二十二年に発見された明治二十五年(一八九二)の写真に写されている獅子頭は、玉前区が前年の明治二十四年(一八九一)に製作した獅子頭を借用したものです。

江戸時代、関東組の方が使用していた獅子頭は、明治二十四年(一八九一)には、かなり傷んでいて使用不能の状態だったことが、昭和四十五年小浜市史編纂室が発行した「雲浜獅子之記録」の中に記されています。

このことから、毎年小浜神社に奉納することは、難しかったのではないかと思われます。

またこの写真から「迎恩社」に玉前区の人も参加されていたようすが明らかになりました。



一番町旧家より発見された絵葉書3枚セット

大正四年（一九一五）十月一日から十二月一日までの八十日間、京都岡崎公園にて大正天皇即位の大札を記念して、大典記念京都博覧會が開催されたその時、絵葉書三点セットが作られました。正にこの時、「若狭固有 雲濱獅子」という名称が渡辺 亨氏によって付けられたと推測されます。すなわち「雲濱獅子」という名称はこの大典記念京都博覧會に、福井県代表としてお祝いに出演するべく、関東の川越獅子ではあるが、若狭の雲濱に伝承された獅子として、若狭固有、雲濱獅子と名付け、お祝いに駆けつけたと考えられます。

大正時代



明治40年5月、四ツ谷にあった酒井家別邸庭で演技を行う雲濱獅子

江戸時代には、藩のお抱えの芸能であった「獅子舞」が明治になり、民衆の芸能として士族や町人などの関係なくこの獅子舞を受け継いでいた事がわかります。

廃藩とともに、藩の後ろ盾がなくなったため、獅子の保存に携わった多くの先輩の努力を再確認する写真です。

明治四十二年（一九〇九）、皇太子の北陸行啓があり獅子舞の一組が、福井県下の余興の一つとして出演しました。

その時、この獅子舞を解説した「御来国に就いて川越獅子演藝の大略」という文書が残されています。雲濱壮年会で獅子舞の師匠であった渡辺 亨氏^{すずむ}が演技や歌詞などについて、その概要を記したものです。

このことから、明治四十二年当時（一九〇九）現在の雲濱獅子という名称は存在せず「川越獅子」と呼ばれていた事がわかります。



昭和35年頃の一番町通りにおいての祭礼演舞

また渡辺 亨氏は大正四年（一九一五）九月三日に、「若州獅子舞来歴の大略」という文書を残し、この文書には、明治四十二年（一九〇九）の北陸行啓の際小浜町の一組は福井県下の余興一部に加わり台覧の栄を賜りたれば、これもまた因縁厚き次第なり、と記しています。

渡辺 亨氏は、自ら「若州獅子舞、教諭」と称しています。

昭和時代

昭和三年、一九二八年昭和天皇即位大礼を祝して大札記念京都大博覧会が、従来の岡崎公園に加え二条城北の京都刑務所跡地、恩賜京都博物館の三か所が会場で催されました。この祝典に、雲浜獅子も出演しています。

昭和四十五年七月、明治、大正、昭和の初期の期間にかけて渡辺 亨氏が記された文書を、小浜市史編纂室で編集した「雲浜獅子之記録」が発行されました。この文書の中には「竹原獅子舞」という項目もあります。

現在雲浜獅子保存会は三組の獅子頭を保存、所有しているが、最も古い獅子頭は明治四十年四月（一九〇七）、雲浜村一番町区の壮年有志が発奮し新調されたもので、調整者は前記渡辺 亨氏、下地大工は一番町森口定吉氏、塗師は同じく一番町の梅田八百蔵氏で、毛植は京都市問屋町の鈴木鳥毛商店で新調し

たもので、特に酒井家でもこのことに関心をもたれ、当時の金額で百三十円をこの費用のために下付されています。

この由緒ある獅子頭も老朽化が進み保全の意味からも昭和六十二年に京都市壬生の神祇工芸西沢において、また平成二十一年には西沢氏の弟子、伊縫良博氏に依頼し、計二組の獅子頭を製作しています。

衣裳については「装束などは藩主軍用、または獵場に用いたるもの故、全て藩主酒井家の替紋をつけある訳なり」と記録にあり、井（いげた）の紋がそれで、さきに行われた小浜城址の発掘調査においても、この紋のついた屋根瓦等も発見されていますが、ただ、雲浜獅子の場合雌獅子にはこの紋が許されていません。このことについては記録には何も残されたものはないのですが、広嶺神社に残る市指定の文化財、祭礼絵巻の雌獅子にも紋がなく、語り伝えられるところによると、関東組当時からついでいな



老獅子つくばい 雌獅子（中央立ち姿）には井の紋がない

かったということ、封建制度下における女性の立場を反映したものであると解釈されています。

人員についても「古来の人員は三十二人にて見れば、元領地川越より藩主が召連れたる下臣の者を関東組と称したる故なり。維新の後是有志の演芸なれば、人員に程度はなしといえども十五人を減じる事は出来がたし」と記録にあるとおり、現在でもそれなりの人員を必要とします。

演技と内容

雲浜獅子は他地方の獅子舞とは異なり、人間への情事のたしなみが舞の筋書に仕組まれているところに、この獅子の演技の面白さがあると云われています。舞は序、破、急の三段から構成されていて、笛と太鼓でそれぞれ舞振りが違い、すべて気合いを揃えて打囃するもので、筋書どおり一庭ひとにわを舞うには約一時間を要します。

舞場所へは最初、白毛混じりの老獅子が出て自分の舞場をとりきめますが、この場合の笛の吹き方は道引といい門掛りへと移ります。老獅子がひと廻りすれば赤い水引をつけた雌獅子が静かに進み出、最後に老獅子に恐れて場所へ出兼ねているところを笛の音に引き出されて、黒い毛の若獅子が出るといふ場所入りで、序の舞が始まります。

これより獅子追いが唄方となって場所に応じ次のような歌を唄うが、この歌は平安朝時代の短歌から詠まれたものと云われ、後に雲浜出身の国学者、伴信友翁が一部修正して今日に至っているもので、十六節から構成され節面白く唄うところに特色があり、川越のささら獅子の歌と比べると、歌詞、節ともかなり変化していますが、中にはよく似たところもあります。



和解を喜ぶつくばいの演技



小浜神社前に奉納

(1) 「廻れや車 みずぐるま、
大崎廻ればせきにからまる」
(2) 「思いもよらぬ 朝ぎりおりて、
そこで雌獅子が かくされたよ」
(3) 「此頃は 岩に雌獅子が巢をかけて、
岩をくだいて雌獅子かくした」
一番の歌詞の中の「大崎」という箇所は、明治時代「迎恩社」として獅子を保存していた時代には「おそく」と教本には記されていました。しかし明治四十二年（一九〇九）、「川越獅子演藝の大略」という文書には「大崎」と記されており、現在に引き継がれています。
今まで見失いたる雌獅子を老獅子が見付け出し、雌獅子をかばって岩の中にかくしてしまっただという歌詞の意味を体し、舞はこれより破の舞となります。
即ち、歌と笛の音につりこまれて廻り舞う内に、老獅子が雌獅子に恋慕し、若獅子との間に妻恋の争いを起し、若獅子を寄せつけずとして

激しく雌獅子に慕い寄り、若獅子もまた、そうはさせじとその中に割って入り、互いに狂い争う場面を云い、通常「蹴合いの場」と云っております。
然し結果は、老獅子は若獅子の若さと勇氣に押されて列外に出てつくばい休み、ひと息つかざるを得なくなります。この場を「白の舞」と云います。
ここにおいて若獅子は、得たりとばかり更に激しく雌獅子に慕い寄り、雌獅子もまた、若獅子を気にかけるようになります。
(4) 「れんじやくめいが、腰に指したる
中脇指は、鞘も目貫も小金巻き候」
この歌で一息入れた老獅子が再び争いを挑み、雌獅子をかこう若獅子に更に立ち向かうが、段々と力つき、完全に若獅子の勝利となります。
(5) 「嬉しやの 風にかすみをふきあげて、
雌獅子、雄獅子が顔ならべた」



沿道の各所で演技を披露

(6) 「むすぼれし 五色に染めたる唐糸を、姫がほげば、ほろりほどける」
この歌は歌詞の如く、争いの責任を感じた雌獅子が、次第に二頭の雄獅子の中に入り、世の常道を論じ、これまでの争いを反省して互いに顔をならべ、もつれを解いて和解への道を進めていく舞に替わります。

(7) 「山がらが、十二のかいこをかいたてて羽がいそろえて もんどりうつとや」
この歌から笛の音も変り、中央の舞となり舞振りも次第に早くなり、和解を喜び合う場面となります。

(8) 「十七八の、かみわけ姿を見る見るも 今のささらが気をちいがした」

(9) 「我が里に、雨が降るやら雲が出るそれをするべに あとひきがはや」
この歌が出て始めの序の舞に戻り「渡り拍子」となります。

「派手に勢いよく、おじぎはゆつくりしてから背のびする位の気味にて舞うべし」と古い教本にはこの舞の難しさが記されていて、心の自然をとり戻した舞となります。

(10) 「京から下りし唐絵の屏風、ひとえにさらりと 引きまわした」
舞は急の舞、「神楽拍子」という早い賑やかな舞囃子となり、互いに喜びを競い合う最高調の場面となります。

(11) 「奥の馬は生れおちると膝を折る、われも見まねに小金折り膝」

各獅子は歌詞の如くに膝を折り、和解をより一層に喜び楽しみ合う「つくばい」の舞となります。太鼓の打方がそれぞれに異なり、変化にとんだ笛の音は

この場を盛り上げるにふさわしく、人間社会でいう仲直りの酒宴の場と考えると興味があります。

(12) 「なりをしづめて能く聞やれ、

森も林も鶯の声」

つくばいの舞の中で唄われる歌ではあるが、この歌詞は神前に限るものとされており、通常は、「まいりきて これのお庭をながむれば

小金小草が足にからまる」

と庭前で舞うときの歌が用いられ、そのほかにも婦人対象のものと、旅人の所望によるものがあります。今日では殆ど使用されていません。

(13) 「白鷺が海のどなかに巢をかけて、

波にゆられて跡たち候」

この歌詞も神前のもので、他に平常のものが一種あり、この歌で各獅子は立ちあがり、再び仲よく廻り舞います。

このあと

(14) 「荒川の鮎の魚さえもんどり打は、われも

見まねにもんどり打たばや」

(15) 「かしも河らぎ、切れも切れよとこのまれて、ならい申してかしの木ぎぼし」の歌が出て、それぞれ喜びの変化を舞います。

(16) 「日は暮る道の根ざさにつゆがうく、おいとま申してあとひきかばや」

この歌が終ると各獅子は打揃い、再び渡り拍子の一部に戻りそれより門掛りの笛に替り、一頭づつが最初の舞場に入り、続いて道引の囃子にのりながら行列を整え、行進をしてまいります。

以上は筋書きどおり一庭ひとにわを舞い納めた演技と内容について述べましたが、祭礼当日には沿道各所で演技の一部を披露するほか、五月三日の適時に小浜神社に宮入りし、最初に子供獅子が演技の一部を舞い、続いて大人獅子が一庭を神前に奉納して神霊をお慰めすることを恒例としています。

さて宮入りも済ませ、沿道各所での演技も終り陽も西に傾く頃、隊列を立て直し高張提燈や小提燈を先頭に、笛方の紅提燈にも灯が入られて祭礼の終幕を飾るにふさわしい「せめ」の囃子で帰路につきます。

この「せめ」の囃子は全ての奉納行事を無事に済ませた感激を表現するもので、古い記録の中にも「前日は用ふべきにあらず必ず終日なり」と記されているほど開放感に満ちています。

舞方は獅子頭の水引をあげ、笛方もすぐ笠を肩にかけて行進することが許されており、三頭の獅子の太鼓の打ち方がそれぞれに異なり笛の調子や獅子追いのかけ声も勇壮で、行進は最後に区内を一周し、区民も総出で手拍子をたたきながら参加し、本陣前に集結して太鼓と笛の制限のない競演となっていわゆる「祭りあげ」で最後のフィナーレを飾り、一切の行事を終ることとなります。



青年の演技指導を受ける子供獅子



先輩の厳しい指導を受ける青年演技者

後継者の育成

以上のように古い伝統と歴史の中に育まれてきた雲浜獅子も、昭和三十二年三月十一日、福井県の無形民俗文化財に指定され、その栄光と重責を全うするため、旧来の保存育成の奉納を組織化し、指導部（舞方、笛方、唄方など）と催事部を設け、保存の強化と後継者の育成に専念しています。

一番町会館内に獅子の練習場を設け、歌詞板や笛の音符板などを常に掲げ、誰でも平常に練習できる仕組を施し、獅子についての協議や研究、演技指導などを行うことにしています。

特に雲浜獅子は年間数回、市の内外に出張公演する機会が多く、鑑賞のほか観光の面でも披露する場合もあり、このことが後継者の育成に、また演技度胸をつける上からも大いに役立っています。

祭礼時の練習は、約半月前から始め、子供と

青年を主に指導部の先輩が特訓を行い、本番に備えていきますが、全ての演技を教本どおり習得するためには、通常約十年を要すると云われています。

歴史こぼれ話

行列の順次は次のとおりで、特に雲浜獅子の場合は、行列の前後に藩政時代をものがたる袴姿かみしもの一文字という警固役がついています。

旗 警固 獅子追(子供)

笛方

獅子

後見

警固

◎ △ ○○○○○○ □□□□□ □□□□□ 白赤黒 ○○○○○○ △ △

獅子頭の目方は凡そ五キログラムあり桐の台で金箔を置いた若狭塗で、頭の入る部分は箆を用いており、耳は熊の毛で形造り、頭と後部瘦隠みのに取付けられている毛は「しゃもの毛」で、長いもので約七十センチ、短いものでも三十センチあって、本数は頭だけで七百本、瘦隠で六百本が付けられており、仕様図とともに記録に残されております。

笛方は紋付き着流しに角帯をしめ、頭には赤い水引を垂れた菅笠を冠り、後見は舞方の交代員として編笠を深く冠り、竹の杖を持っています。

舞方については、人それぞれに癖や特長がありますが、教本には「頭、手、足三つ揃わざれば姿あしく形をなさず」と厳しい原則が示されており、その他の細かい点についても切々と述べられています。

特に、老獅子を舞う者は老人らしく、雌獅子を舞う者は愛らしく、若獅子は若々しく、時にはまた争いの場面はその気になって、しかも舞の筋書を意識し

てその場面に適合した演技を行わなければ、真の獅子舞ではないとまで云われ、このことについては笛方も強弱などの点で応用されていて、練習の積み重ねが必要とされています。

また、獅子頭や舞い方などが川越の「ささら獅子」と比べて、似ても似つかぬものになっている点について、大阪市在住の獅子舞研究家 杉本茂春先生が語られたところによると

「川越より来た当時は「ささら獅子」として舞っていたものと思うが、三百年も舞続ける内に、歌や三匹が舞うと云う形のみが残り、あとは大陸系の鳥の舞に影響され変ってしまったとも考えられる。中近東でケラバミ(悪魔退散)と云って爪先で飛び廻る鳥の舞があり、この特徴をそのまま取り入れているのが、今の雲浜獅子であり、いつの日か今の姿に変わってしまったものである。」と指摘されています。

また先祖が酒井公と一緒に川越からこられた 第四代小浜市長であり、若狭高等学校長でもあった歴史文学でも有名な鳥居史郎先生も「ささら獅子」と異なる点について「若狭は大陸文化の揺籃地ようらんであり、その影響を受けて小浜へ来てから頭に鳥の毛を差立てたり、又、つま先で踊ったりするように変化したのではないか。」と話しておられ、これら両先生のお話を総合するとなるほどと思われる点多々あるように考えられます。

川越ささら獅子舞との友好関係

埼玉県川越市は、小浜藩祖 酒井忠勝公の前任地であり、雲浜獅子の故郷でもあると云うので、昭和五十七年十一月三十日、川越市長 川合喜一氏と、小浜市長 浦谷音次郎氏との間に調印が行われ、両市の姉妹都市盟約が実現しましたが、雲浜獅子と川越ささら獅子との間には次のような友好関係もあります。

(1) 昭和三十三年四月十日雲浜獅子保存会一行が川越市役所を表敬訪問し、当時の同市商工課長 根生貞次郎氏より、川越ささら獅子舞について詳細な説明を受けたが演技を見学することができなかった。

(2) 昭和四十六年十一月、川越ささら獅子舞保存会の医学博士 井上彦二郎先生が、内角誠一雲浜獅子保存会顧問を訪問せられ、ささら獅子舞の資料を沢山下さると共に、雲浜獅子舞についても質問などがあり、両市の文化交流について話し合った。

(3) その結果、昭和四十八年五月二日、ささら獅子保存会の三澤政太郎会長ほか三十五名の一行が貸切バスで小浜に見え、雲浜獅子と共に小浜神社で、ささら獅子舞を奉納せられ友好を深めた。

(4) 昭和五十四年五月二日、更にささら獅子保存会相談役 石川富三氏一行が小浜に見え、一番町で雲浜獅子を見学され保存会育成などについて話しあった。

(5) 昭和五十七年十月十五日、川越市制六十周年記念大会に雲浜獅子が出演することとなり、鳥居史郎前市長を団長に保存会一行十八名が川越市へ三百四十八年ぶりに里帰りを行い、川越市役所広場の仮設舞台や石原町観音寺などで、ささら獅子舞と共に競演を行い沢山の川越市民の方々に感動を与えた。

(6) 同年十一月十三日、川越ささら獅子舞保存会 新井 清保存会長一行三十名が小浜を訪問され、小浜市文化会館に於いて多くの市民を前に雲浜獅子と競演し、又、これと同時に、川越、小浜文化交流実行委員会の土金富之助委員長を団長とする一行三百人も小浜を訪問され、両獅子の競演を鑑賞され、友好親善の度を深めた。

(7) 平成四年四月十七日、村上貞夫川越市助役を団長に川越市民百二十五人が小浜市にこられ、小浜神社境内に於いて雲浜獅子を見学せられ、酒井家菩提の空印寺にも参拝された。

(8) 同年十月十七日、川越市制七十周年記念大会に、雲浜獅子一行が再び川越市を訪問し、各所で演技を披露し大きな感動を与えた。

(9) 以上のほか川越市からは毎年五月二日、代表者が見え雲浜獅子を見学され、両市の文化交流に強い意欲を示されている。



昭和57年10月15日、川越市制60周年記念大会で舞う雲浜獅子

雲浜獅子のルーツは 今日の川越「石原のささら獅子舞」なのか

雲浜獅子の伝承は、酒井忠勝公国替えの際に武州川越から、演技者三十余戸を召連れて小浜へ入城したことに始まる。ただ当時の獅子にまつわる資料は極めて乏しく、その実態をうかがうのは容易ではない。

雲浜獅子のルーツが武州川越にあることは疑いもないが、それを今日の石原のささら獅子舞（以下「ささら獅子」と記す）にそっくり重ね合わせることは、幾多の疑問が残る。

雲浜獅子保存会が「ささら獅子」を初めて鑑賞したのは、意外にもそれ程昔のことではない。昭和四十八年五月の小浜神社例祭で雲浜獅子と「ささら獅子」の合同奉納がなされた時であった。おりしも全国的な姉妹都市ブームの中、雲浜獅子と「ささら獅子」の合同演舞は小浜・川越両市提携の幕開けを担うに最も相応しい歴史物語を見事に披露してみせたのである。

五月二日、朝からあいにくの雨模様で当日の獅子巡行はすべて取り止め、合同宮入奉納のみが小浜神社絵馬堂で演舞されることになった。雲浜獅子の本家とされる「ささら獅子」の演技は衆目の万感の期待でいやがうえにも盛り上がり、異様な熱気の中で始まった。その期待は、雲浜獅子との演技形態の比較検

討から、それぞれの歴史と伝承に大いに想像力を喚起させるもので、いわば三百五十年目の歴史絵巻の御開帳に立ち会えた証人としての高揚感と相俟って一層興味深いものだった。

しかし、その期待も演技の進展につれて、軽い戸惑いに変ってゆき、それは「ささら獅子」の華やかで豪快な舞踏の見事さはさる事ながら、雲浜獅子との演技の形のあまりの違いに起因するものと思われた。雲浜獅子のルーツ、本家の舞と畏敬の念を抱きつつ鑑賞しながらも、どこか身にそぐわぬ違和感が最後まで払拭しきれず、かえって雲浜獅子伝承の歴史の謎を深めた交流会として記憶に残るものとなった。ちなみに競演した雲浜獅子の舞方は御三方ともすでに鬼籍に入られ、今は伝説の舞手として語られる行方 弘(白)、前田久固(赤)、小川重雄(黒)の面々であった。

かくして獅子関係者の間でも雲浜獅子のルーツにちなみ「ささら獅子」との相違についていろいろと見解の分れることとなった。前述にもある通り、獅子舞研究家杉本茂春先生、歴史文学研究家鳥居史郎先生の両氏とも「ささら獅子」を雲浜獅子のルーツとして捉え、小浜の地で大陸文化の影響下、いつの日か(雲浜獅子が)今の姿に変わってしまったのだらうという見解を述べておられる。両先生とも獅子が川越から来た史実を、「ささら獅子」を連れて来たという解釈をされたために、雲浜獅子と「ささら獅子」の明らかな違いについて、三百年にわたる歴史・文化のグローバルな展開の中で変化したと論じなければならなかったのだらう。

しかし雲浜獅子伝承に携ってきた現場の実感としてはいささか納得がいかない。少なくとも、ここ数十年に亘って体験してきた雲浜獅子伝承の現実、先代の指導・口伝は絶対的教義であって、ひとたび稽古が始まれば舞方の一挙手一投足に容赦のない激声飛び交い、舞の修得はまず先代の忠実な物まねから始まる。もし下手が許されるとすれば、それは個の体型的、体質的ないわば癖と呼ぶべき程度の差異でしかない。獅子の稽古とは先代の立ち居振る舞いの忠実な模写を、いかに自らの体に覚えさせ、どのように表現するか、の修練の積み重ねにほかならない。

つまり獅子伝承の現場は今もって厳しくも誇りに満ちていて、百年遡ろうとも、たとえ三百年遡ろうとも、そのような伝統的師弟関係の仕組みの中で伝授継承されてきたものであり、国替え当時の演舞形態を明らかに逸脱するような表現や演出は、容易に許されなかったに違いない。まして藩祖忠勝公(一人一倍げん担ぎの性格がうかがえる)肝入の門外不出の秘伝の技となれば尚更である。雲浜獅子と「ささら獅子」の演技形態は三百年の歳月で計ってみてもあまりに違いすぎるのである。

当地に伝えられた川越から来た獅子と「ささら獅子」は別もの(雲浜獅子、「よから獅子」双方とも三頭一人立ちの獅子舞で男女の愛憎を舞のテーマに仕組んだ構成からもルーツを同じくする兄弟獅子と見るべきだらう)であって



昭和天皇、皇后両陛下のご高覧を賜わる



昭和57年から女子小学生も参加するようになった

「やぎら獅子」の七十有余年の中絶（大田ヶ谷村の演舞者の指導を得て復活と伝えられており、忠勝公が召連れた獅子舞を再興したという記録は確認できない）を鑑みれば、当地に伝わる獅子舞こそ酒井忠勝公御抱え獅子の原形に近いと説く郷土史研究家も少なくないのである。

むすび

雲浜獅子は古くは大正、昭和と、二度の御大典記念京都博覧会に出演しております。無形文化財に指定後は、昭和三十七年に昭和天皇、皇后両陛下のご高覧を賜ったほか、伊勢神宮や春日大社、京都祇園会にも奉納し、また大阪で開かれた万国博覧会や全国郷土民芸大会のほか別記の通り数多くの催しに出演しております。昭和六十二年には文部大臣表彰に輝き、平成五年十月には初の海外公演でニューヨークに出張するなど、県指定の無形文化財として、その名に恥じないよう努力しています。

藩祖から始まり、幾多の先輩各位が築きあげ残して下さった、貴い遺産とも云うべき伝統ある郷土芸能「雲浜獅子」こそ、私達保存会員の心ふるさとであり、永く大切に保存して立派な演技を後世に伝え、その誇りと栄光をいつまでも保っていたきたいと念願しております。



ニューヨーク世界貿易センタービルでの出張演技

現在までの主な上演

昭和36年12月2日	第3回近畿東海北陸ブロック民俗芸能大会（大阪市）
37年4月20日	昭和天皇、皇后両陛下北陸路行幸啓天覧（小浜市）
38年5月17～19日	日本郷土芸能大会（京都市国際ホテル）
39年7月17日	京都祇園祭（八坂神社、四条通）
42年10月15・16日	国際観光年記念全国民踊大会（伊勢市）
15日	伊勢神宮奉納
43年9月15日	びわ湖大博覧会（大津市）
44年11月10日	NHKふるさと歌まつり（小浜市）
45年4月15～18日	日本万国博覧会 福井県の日（大阪府）
48年1月26～28日	福井県観光と物産展（東京 西武百貨店）
5月2日	川越ささら獅子とともに小浜神社へ奉納
10月14日	日本海博覧会（金沢市）
49年11月3日	松下電器電子部品15周年記念大会（門真市）
50年3月6日	姉妹都市親善訪問（奈良市）
	春日大社奉納
51年5月23日	松下電産労組結成30周年記念大会（京都ささ山）
10月21日	東海、北陸ブロック大学長会議（小浜市）
12月5日	NHK東海北陸福井わが自慢（福井市）

52年2月3日	小浜、慶州姉妹都市提携調印記念式（小浜市）
8月21日	77日本海フェスティバル芸能大会（金沢市）
10月9日	第19回近畿、東海、北陸ブロック民俗芸能大会（金沢市）
53年5月18日	福田一代議士喜寿祝賀会（東京ホテルオークラ）
6月29日	北信越5県信連役員会（小浜市）
10月29日	北陸地区国立教職員共済組合大会（小浜市）
54年9月21日	田辺経営コンサルタント全国大会（京都国際会館）
11月12日	北陸、東海、近畿知事会議（高浜町青戸園）
55年5月14日	日本教育大学教会北陸地区評議員会（小浜市）
7月3日	全国建築業組合総会（高浜町青戸園）
18日	関東医師会若狭の旅（敦賀市）
11月2日	舞鶴だるま祭り（東舞鶴）
56年5月5日	福井県児童福祉大会（福井市）
11月7日	福井県民俗芸能大会（敦賀市）
57年6月13日	東京学習院婦人のつどい（小浜市）
9月25日	東大和第三中学校修学旅行のつどい（高浜町青戸園）
10月15・16日	川越市制60周年記念大会（埼玉県川越市）
11月4日	中部私鉄協会総会（小浜市）
13日	姉妹都市川越ささら獅子と競演（小浜市）
58年6月19日	敦賀昭英高校記念式（敦賀市）
11月12日	福井県民俗芸能大会（鯖江市）

59年	8月3日	日本国語趣味の会（小浜市）
	9月23日	雲浜獅子保存会館落慶祝賀式（小浜市）
	10月21日	農協くみあいまつり（福井市）
	24日	全国少年指導者講習会（小浜市）
60年	6月1日	NHK北陸歌謡スペシャル（福井市）
	11月9日	若狭湾国定公園指定30周年記念大会（小浜市）
	23日	第27回近畿東海北陸ブロック民俗芸能大会 くにうみの祭典（兵庫県洲本市）
	10月6日	大阪21世紀協会主催御堂筋パレード（福井県代表）
	11月3日	名田庄ふるさとまつり（名田庄村）
61年	5月23日	全国菓子商組合代表者会（小浜市）
	6日	北前船小浜寄港歓迎会（小浜市）
	6月1日	小京都観光物産展（京都高島屋）
	6日	全国酒造組合連合会総会（小浜市）
62年	1月4日	大阪21世紀協会主催御堂筋パレード（2回目）
	9月28日	小京都観光物産展（大阪堺高島屋）
	6月21日	全国食品協会総会（芦原市）
63年	10月21日	大阪21世紀協会主催御堂筋パレード（3回目）
	6月11日	松下労組創立20周年記念祝賀会（小浜市）
	8月3日	東映太秦テレビ水戸黄門出演（京都市）
	26日	奈良シルクロード博公演（奈良市）

平成1年	9月3日	中部日本サイクリング大会（小浜市）
	6月4日	JC福井県大会（小浜市）
	7月9日	広嶺神社々殿竣工祭（小浜市）
	9月23日	県文化財発表会（丸岡町）
2年	1月6日	JR西日本北陸キャンペーン（大阪市高島屋）
	2月17日	北陸郵政フェスティバル（金沢）
	9月29日	天理教北陸大教会創立100周年記念祭（小浜市）
	10月23日	北信越市長会（小浜市）
3年	9月8日	独秀流全国大会（小浜市）
	11月16日	八百比丘尼サミット（小浜市）
	23・23日	ふくい産業展（東京都）
4年	8月3日	嶺南振興ふるさとまつり（上中町）
	9月19日	俳句連盟北信越大会（小浜市）
	10月17・18日	川越市制70周年記念大会（川越市）
5年	5月29日	北信越短歌会（小浜市）
	6月29日	小京都の会（小浜市）
	10月7日	東大寺サミット（小浜市）
	10月27・28日	93ジャパンフェスティバル（ニューヨーク）
6年	5月27日	小浜病院祝賀会（小浜市）
7年	2月9日	全国社交組合福井大会（福井市）
	6月13日	全国尼僧会議（小浜市）

10月31日	若狭、越前産業フェア（福井市）
8年1月24日	FBC年賀会（福井市）
5月26日	ふるさと祭り（小浜市）
10月20日	姉妹都市物産フェア（小浜市）
12月2日	福井県民俗芸能大会（小浜市）
9年2月10日	福井県ふるさとの日（福井市）
3月3日	若狭観光と物産展（京都市）
3月18日	若狭観光と物産展（神戸市）
4月10日	さくらマラソン前夜祭（慶州市）
7月17日	川越ボランティア招待（小浜市）
8月7日	全国国語教師大会（小浜市）
11月5日	川越産業博覧会（川越市）
10年1月5日	重油御礼キャンペーン（東京都）
1月31日	若狭物産展（神戸市）
9月10日	JR西日本北陸キャンペーン（小浜市）
11月15日	福井県立若狭歴史民俗資料館特別展（小浜市）
11年7月6日	北信越議長会（小浜市）
7月18日	全国氏子青年大会（敦賀市）
9月21日	交通安全大会（小浜市）
10月9日	ねんりんピック99マラソン交流大会（小浜市）
12年5月15日	小京都観光物産展（京都市）

9月28日	日本水産学会秋季大会（福井市）
10月15日	莊川ふるさとまつり（莊川村）
13年4月6日	さくらマラソン前夜祭（慶州市）
6月19日	小浜商工会議所50周年記念（小浜市）
10月20日	福井県民長寿祭（小浜市）
11月25日	体験学習（小浜市）
14年1月27日	福井県観光と物産展（東京都）
3月2日	若狭の神々の道フェスタ（小浜市）
4月30日	オーストラリアの学生との交歓会（小浜市）
6月27日	働く婦人の家中部ブロック連絡協議会総会（小浜市）
10月11日	福井県老人クラブ大会（小浜市）
11月12日	「御食国若狭おばま杯」親善ソフトバレー大会（小浜市）
11月24日	浜中ふれあい講座（小浜市）
15年2月8日	福井県「越前若狭」の物産と観光展（大阪市）
8月10日	全国高等学校弁論大会（小浜市）
9月27日	若狭を謳う（小浜市）
9月27日	福井県無形民俗大会（小浜市）
10月12日	若狭路博 国際芸能祭（小浜市）
16年8月21日	オタイコまつり（織田町）
10月2日	スポレク福井2004（福井市）
10月3日	スポレク福井2004（小浜市）

11月20日	国際ロータリー二六五〇地区大会（敦賀市）
17年5月27日	第50回日本身体障害者福祉大会（武生市）
10月14日	第3回旅と温泉のフェスタ2005（大阪市）
10月20日	北信越市長会（小浜市）
10月22日	国民文化祭2005オーブニングパレード（福井市）
18年5月25日	蓮師法縁隆源会全国大会第2回（小浜市）
10月22日	JR直通化開業イベント「海道浪漫2006」（敦賀市）
19年4月7日	御食国若狭小浜を食する会（吹田市）
12月1日	獅子が集まる日（川越市）
20年8月30日	沿岸警備茶屋（小浜市）
10月18日	第2回ふくいふるさとまつり（若狭町）
11月9日	特別展獅子頭展（小浜市）
21年3月1日	広嶺中地域プラン（姫路市）
6月7日	全国植樹祭（福井市）
11月1日	新獅子頭新調奉告会（小浜市）
22年5月22日	平城遷都1300年祭姉妹都市ウィーク（奈良市）
5月22日	日本水産工学会学術講演会（小浜市）
23年5月18日	京王文化探訪（おおい町）

本書は平成六年発行の「雲浜獅子」（内角誠一著）に加筆・修正のうえ、再編集して発刊したものである。
編集委員は保存会会員の小川和彦・宇田川省二・青山潤郎・木戸孝一郎・大竹臣哉・宮田敏哉である。

福井県無形民俗文化財

雲 浜 獅 子

一九九四年九月二十二日 初版発行

二〇一一年九月一日 第二版発行

編 者 雲浜獅子保存会編集委員会

発 行 雲浜獅子保存会

福井県小浜市一番町（〒九一七-〇〇七二）

印 刷 有限会社 宇田川印刷

協賛 財団法人げんでんふれあい福井財団

